

にいがたこどものメンタルケア・ネットワーク

「こどものメンタルケア事例検討会（第8回）」開催要領

1 趣 旨

近年こどものこころの問題は、発達障害、虐待、いじめ、不登校、ひきこもりなど複雑化、多様化しています。また、新型コロナウイルス感染症の影響による学校・家庭生活の大きな変化はこどもたちにさらなるストレスを与え、これらの問題をより重篤なものにしています。

このような背景からこどものこころの問題に対する医療ニーズが増大していますが、このような状況に対応するためには、医療だけでなく、教育、保健福祉といった幅広い分野の専門家による支援や各分野のネットワークの構築が重要です。

本県では、令和3年度に児童精神ケア体制検討ワーキングチームを設置し、こどものこころの問題の対応の方向性について検討しているところであり、その中でも人材育成やネットワークの重要性について議論されています。

このような中、こどもにかかわる教育・医療・保健福祉の関係者に対して、こどものこころの問題に関する理解、対応力の向上及び関係機関の連携を深めることを目的として、「にいがたこどものメンタルケア・ネットワーク」と称し、事例検討会を行うこととしました。

2 主 催

新潟県

3 共 催

新潟大学医学部

4 日 時

令和6年8月8日（木） 午後6時30分から午後8時まで

5 内 容

テーマ「こどものトラウマについて」

・ミニレクチャー、グループワーク、質疑応答

※こどものトラウマに関する基礎知識や、トラウマ症状に気づいた時の基本的な対応などを、事例を交えたミニレクチャーとグループワークを通して皆さんと共有します。

6 講 師

新潟大学大学院医歯学総合研究科地域精神医療学講座 特任准教授 杉本 篤言 先生

新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野 准教授 江川 純 先生

7 対象者

教育関係者（教員・養護教諭・SSW・SC・学校医等）、医療従事者（小児科医・精神科医等）、保健・福祉関係者、保育・幼児教育関係者等

8 開催方法

オンライン開催（使用ツール Zoom）

9 申込み方法

「新潟県電子申請システム」下記の URL もしくは二次元バーコードからお申込みください。

https://apply.e-tumo.jp/pref-niigata-u/offer/offerList_detail?tempSeq=12167

10 申込期限

令和6年7月31日（水）午後5時まで。



11 注意事項

- ・ 1 端末を共有して複数名での視聴はご遠慮ください。
- ・ 開会から閉会まで通して参加していただくことを原則としますので、一部分のみの参加はご遠慮ください。
- ・ 事務局を除き、参加者にはZoomのカメラをオンとし、顔を映して参加いただきます。マイク及びカメラ機能のないPC等の端末での参加はできません。
- ・ 特にグループワーク中はカメラ・マイクをオンにして意見交換ができるようにしてください。
- ・ ただし、グループワーク中に講師や事務局がカメラをオフにして、ブレイクアウトルームを巡回させていただきますことをご了承ください。

12 これまでの事例検討会について

- ・ これまでの事例検討会の開催内容やアンケート結果等について、県ホームページに掲載しています。下記 URL をご参照ください。

県ホームページ「にいがたこどものメンタルケア・ネットワーク こどものメンタルケア事例検討会について」

<https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/shougai/fukushi/niigata-kodomono-menntarukea-netowarku.html>

【講師ご紹介】

杉本 篤言 先生

子どものこころ専門医・指導医、日本小児精神神経学会代議員、カウンセリングオフィス VISION 代表、NPO 法人新潟トラウマ治療協会理事長、新潟県児童精神ケア体制検討ワーキングチーム委員。

新潟大学医学部医学科卒。平成 22～23 年、あいち小児保健医療総合センターに国内留学し杉山登志郎先生に児童精神科診療を学ぶ。平成 26～30 年、新潟県立精神医療センター児童精神科病棟長。ウェアラブル表情筋筋電図によるヒトの快・不快感情分析研究、いじめ予防・介入国際共同研究等に取り組んでいる。

江川 純 先生

子どものこころ専門医、日本小児精神神経学会認定医、新潟県児童精神ケア体制検討ワーキングチーム委員。

平成 15 年、新潟大学医学部医学科卒。平成 20～21 年、あいち小児保健医療総合センターに国内留学し杉山登志郎先生に児童精神科診療を学ぶ。自閉スペクトラム症（ASD）の病態研究に従事し、平成 30 年～令和 2 年にマイアミ大学神経外科学 Vance Lemmon 教授の研究室へ留学。その後も県内の複数の施設で児童・発達障害の専門外来を担当しつつ、ASD の病態研究を続けている。